谷間におちた保母のうた

鈴木とく

私は、新入児の我まゝに魅せられる。猛然と、めちやくちやに、がむしやらに、或は、無言の拒否で、吾を最愛の母からはなそうとする者に、むかつて来る迫力。

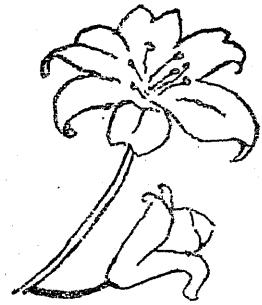
泣きわめかれ、ひつかゝれ、髪をむしられ、ひじてつを喰い果ては逃げられ……。

私は、この様な新入児に、新鮮さを感ずる。先生だつてなんだつてかまうもんか、大好きなお母さんからはなしてしまう、不安なものに対する真剣な、自分をかくさない、限りをつくしての抵抗、赤裸々であり、真剣であり、純一である。これに対して、保母も亦、真剣である。自分のもつ、あらゆるものを披瀝して、なだめ、すかし、たまたまには気合をかけ、はては泪ぐんで、この猛然たる者を自分のものにしようと真実である。この真剣さと、真実さがふれ合う所に、新鮮さと魅せられるものを感じるのがもしれない。

この幼子達に、保母は年毎に失いかけた新鮮さをとりもどさして貰う。私はこの幼子の様に、がむしやらで、赤裸々な、何かにむかつてつき進む、真剣な、保母の若さを求める。そして若い保母に、この事は尊い事であるし、技術の貧困と、経験の浅さと学問のたりなさを悔恨しても、なお真実が、そのまゝ残つて、懐しまれるものであると言いたい。幾年の、年古る保母となつても、この若さをみとめて励まし、失敗を語つて、次に来る若さへの力ともなり、自分も亦、その気持を失わないようがともしたい。自己の若さを、ふりかえる事は、様々な悔いのみ多くして……で、なるべくそつとして、かくしておきたい事のみ多いのであるが、語る事で、そのあとをふまず、又その事を土台にして、幼子へのよりよい計画が生れるならば、昔を語るのは、古い者の真実かもしれない。

☆

久しく音信の絶えた、私の若い頃の保育所の子供から、保母になりましたと、便りをうけて、楽しいやら、恥しいやら、嬉



しいやら、何かをしてあげなければならない様な、色々な気持でいながら、まだ、はげましの言葉も送つていない無精者の、不親切な先生である。

同じ頃の子供――一人は大学最終学年、一人は高校を出て勤労に従事している――が、思い出した様に、時々尋ねて来てくれる。何と云う話もせず、学校の話をしたり、新劇の話をしたり、映画をみませんか、とさそつたり。私はこの育つた人たちをみると、その頃の保育者としての自分のガムシャラ振りが、恥しく、悪かつたな、とひそかに、この人達におわびをしている。そして一方、矢張り、何となく、その若い頃の保育を懐しんでいる。今ならあんな事もしない、そして今の保母さんは、あんな風に子供を扱わないだろうから、今保育される子供たちは、昔の子供たちより幸福だなと思うのである。あんな事、あんな風と云うのは、勉強する機会も、団体も少く、暗中摸索して、子供についての色々な研究も、取扱い方も、経験も少いまゝに、思いつきやら、人真似やらで過してしまつた事である。たゞ残つているのは、それなりに、子供達へも、仕事へも、真実な、何かを求める気持で一杯だつたと云う事だけである。

私はこの育つた人達に、保育所当時の事をきいてみると、一緒の地域に住んでいないと、その頃のお友達もわからないし、何も記憶にないと云う。たゞ、叱られた事やら、子供劇を見に行つた事やら、キャムプに行つた事が、ボンヤリと残つていると云う事である。そして私の保育のどの年代の子供にきいてみても、キャムプが面白かつたと云う。それは、肉親をはなれて最初の長い旅であり、冒険？　であつたからだろうか。それとも、自分達で、自分達の生活をした最初の経験だつたからだろうか。叱られた事とか、キャムプの事とか、何か劃期的な事しか記憶にないとすれば・日々の保母の苦労は、幼子の中に影もとゞめず、日月と共に流れ去る、果敢ないものである事を思うのだが、子供達へのその労苦が、自分を育てあげてくれたのではないか、と思うと、今は成人した、そのかみの、様々な子供達やその母親である勤労婦人に、限りない感謝の念が湧いて来る。あの子供は、あのお母さんは、と思い出す度に、過去の保育所のくさぐさの事が浮び、つきない追憶は、私を楽しませてくれる。

保育所――昔は託児所――に仂いた、保母の一人々々の追憶こそ、日本の保育所の内なる苦闘の歴史であり、恥しくても、それが語られてこそ、これからの日本の保育所のあり方を考えてゆく、よき反省の資ともなるのではないかと思う。

☆

今は成人の途上にある、私の保母としてのはじめの頃の子供達が、その長い一日を遊びくらした保育所は、その頃生活学校とか、労作教育とか云う言葉があつたが、全く、生活保育所、労作保育所であつた様に思う。それは教育の深い根拠ある考えから生れたものでなく、設備不十分、人手不足から生じた、困惑の結果であつた。

仕事のあとで、夜おそく迄、三晩も四晩も保育方針について議論した二十三、四代の、経験も研究も浅いどんぐり同志が、

漸くまとめあげたのは、生活訓練に重点をおき、初歩的な社会生活、集団生活の訓練が、それと共になされなければならないし、子供を通して母親へ保育所の意義を知らせ、母親教育を共にしなければならないと云う意見であつた。

之は、入所幼児の家庭環境から押しはかつて考えられた事で現在の様な、高度な幼児教育の意見からおし出された事ではなかつた。所謂その頃の幼稚園保育五項目は、幼児の精神や身体のよき発達を促す為に注意深く計劃されたものでなく、長時間の保育を埋めて行く手段としてとり入れられた感じであつた。

この保育方針を、どの様に保育で行うかの為に、やつてみたり、逆もどりしたり、思いつきの計劃で、討論したり「盲、蛇におぢず」の様なことを、若さだけで押し通してしまつた感が深い。この為に、痛手をうけた幼児が、屹度あつたと思うと、何ともおわびのしようもなく、この後の保育でそのあやまりをしたくないと思うのみである。

三人の保母と一人のお手伝いさんとで、八十人の幼児の保育給食を分担、母の会、掃除、事務等々もやつた頃、夜更ける迄語り合つたり、新劇を見たり、映画を見たり、徹夜で飜訳小説をよんで、翌日けろりとして子供達と遊び過した事を思うと、年とつた事を悲しむ前に矢張り楽しくなつてしまうのは未来である幼児を相手にしているので、自己の年輪に気づかない愚な幸福であろうが。

ともあれ、自分達のたてた保育方針を一応是として、その方法について考えた丈でも勇敢であつた様に思う。

二十坪のホールと、八畳位の一段高い畳の部屋、机と椅子を出せば六畳位になる部屋丈での保育は、結局子供達の勤労をかりなければ、保育室に使つたり、ホールとして使つたりする事が出来ず、一日に二度以上の机や椅子の出し入れは、保母にも幼児にも一仕事だつた。二十五人の三才児に、一人の保母が手順よく、他の組にめいわくをかけずに、生活訓練や集団生活の指導をしようとしても、とても容易な事ではない。そんな事から、保育所は大半が家庭的な生活であるとの理窟をつけて、地域別グループをつくり、年長、年少の、同情と協力の生活をさせた事が、保母の手助けとなつて人手不足を補つてもらえたり、母親の一部から、お勉強をさせてくれない——折紙を教えたり、字を教えたり、歌や遊戯を教えたりしてくれない、——と不平をもらす人がある事から、年齢混合のグループ生活を、間違つた事をしている様に感じられて、その中で年齢別にする保育もとり入れたりしたが、何とも云えない和かな、家庭の様なものを感じるこのグループ保育に、今もなお愛着を覚えるのである。街頭に出れば、社会に出れば、常に、同年齢の安定感の中にのみ生活は出来ないし、不安定や、困難を克服した喜びの上に、なおそれ以上の、力や創造への憧れが湧き上るのではないか、そう云う強さも養われる必要があるのではないかと云う考え方が、批判もうけずに私の中にあるから、生活指導の上での年齢混合保育をすて難いものに感じるのかもしれない。

こんな頃の、幼児との生活の日記や感想から、若い方達が昔噺を読む様な興味を覚えてくだされば、難しい保育理論のあい

まのなぐさみに、軽い討論の種ともなるかもしれない。

☆

一九三五年七月

地域別グループをする事で、二時間も話し合つた。結局、お互に色々な意見はあつたが、地域を受持つた保母が、幼児と共にその母をも受持つて、幼児の保育の効果を上げると共に、母親の生活改善と、生活向上をも計つて行かなければならないと保育所と母の会の連関について意見が合い、生活と団体の訓練を、主な目標とした保育を試みようと云うことに大体の意見の一致をみた。云い出しはしたものゝ、なんだか今後のやり方について不安も感じる。

☆

一九三五年七月

毎日、お帰りの時、同じ地区のお友達、同じ道を通つて帰る子を一緒にして帰らせたり、お昼、おやつ等の時一緒に集つたり、散歩の時に同じ地区の子供同志並んで出かけたりしたのでどうやら自分達の塊を感じて来たらしい。おやつのあとで、この塊に名前をつけようと、子供たちに相談をしたら、みんな動物の名前ばかりとび出す。何とも仕方がないので、自分の組はゾオ組と云うことに落着いた。あとで、他のグループにきいてみたら、矢張り同じで、ライオン組、キリン組だと云う。まるで動物園の様だ。しかし、之が、子供たちの発案と相談で決つたものなら、それをとりあげるよりしかたない。

保母の負担軽減のためにのみ、このグループ保育がなされてはいけない。これ迄にみられなかつた、弱い者、小さな者へのいたわりの気持を、より優しいもの美しいものに高めたい。

家庭訪問、今迄の様に地域があちこちにとばず、一軒に行けば　ついでに近所の家も歩いて、自分の組の子供の家庭の様子や子供の様子を見たりきいたりして来ることが出来てとても便利だ。

一九三六年六月

おやつの後の「探偵エミール」の話を、丁度切りのいゝ所でよして、いつもの様に「さあ、お机を片づけてお帰りにしましようね」と云うのを、待ちかまえていた様に、保君が云い出した。

「いつもく僕だけして、つまんないや、センセ、僕、いやだよ、いやだよ」

「保君は一番大きいんだから　さあ、皆でしようつて、云つてやるのよ。自分だけ、ひとりでしなくてもいゝのよ」

「ふうーん」と、気のない返事をして、お皿を持つたまゝ突立つて居た。すると、青山とし子ちやんが「ネエ、センセ、お机片づける順番きめようよ」と、云い出した。

あゝ、本当だつた。なぜ気がつかなつたのだろう。子供達がこんなに云い出す様になる迄ほつといたのか。子供達自身から要求が出たのだ。保君も、とし子ちやんも、お片づけの時になると、一番よく仂く。グループの中で、年長なので、それに、何時も、いやな顔もせず、小さな子の分迄運んでやつたりしてやつているので、そのまゝにしておいたのだ。何時もく自分

達ばかり仂く、皆は遊んでいる。ほんとに、グループの皆で協力して片づけ方をする様に導くべきだった。

「ほんとね。ではごうしましよう。今日は男の子がお片づけして頂戴ね」

「うん、いゝよ。この次は女の子だね」

それで今日は一段落着いたけれど、グループを二つの交代当番にして片づけ方をさした方がいゝか、それとも全体で、自分の組の物を片づけるか、考えなければならない。

なるべく皆でやつた方がいゝのだ。相談会を、あした又、おやつの時にしよう。子供たちは、小さいなりの意見を云うだろう。今日、子供から、当番にしようと云い出された事は、とても嬉しい事だつた。そして又、保君が、自分の云いたい事を、はつきり云つてくれた事もいゝ事だつた。

いやな事はいや、とはつきり云い、わかつたら快よく動く人になつてほしい。

保母が一つの、おどかし的存在となりたくない。自由に物を云わせ、そうした空気をつくり出す事を、もつとよく考えなければならない。

☆

一九三六年五月

先日からの机の片づけ方の問題を、今日は皆で決めようと、お八つを頂きながら、順々に、どうしたらいゝかをきいていつた。

「やらない子は、つれて来て一緒にやるの」

「お当番がやつたらいゝの」

「みんなでやるの」

お隣りに坐つている友達の真似をして云う子もあつたけれど、次々に云つてくれて嬉しかつたが、全部が云い終らない中に、用事が出来て、子供達からはなれなければならなかつたので、みんなの言い分もきかず、いろいろと話合いもせずに、中途で悪いなと思つたけれど「男の子がお机を運ぶ時は、女の子がお椅子、次の日は反対に、そして順々にして行きましようね。そして、どの子も、どの子もみんなで、お片づけをしましようね」と、決めてしまつた。

用事がすんで帰つて来たら、大きい子達が側へ来て、「センセ、今日は一等だよ。みんなでやつたよ」と。早速報告してくれた。

「そお、よかつたわね」と云つたけれど、何か子供におしつけてしまつた様な感じでいやだつた。も一日延ばして、明日又、お八つの時に、残つた子供達の言葉もきいて、ゆつくり、みんなと相談すべきだつた。決められ、おしつけられた言葉は、その時丈で、ほんとに、子供達自身が、喜んで仕事をし、仂く原動力とはならない。大きい方の子供達が納得して、お片づけをみんなで楽しくする様になれば、小さな子はついて行く。小さい子供達は、やりたくてしかたなくても、大きな、重い机を動かす丈の力がないのだ。このきめも、その中にくづれて行く事だろう。そしたら又、今度こそ、グループの皆で語り合つて、子供達のやつて行きたい方法で、楽しくお片づけをする様に相

談しよう。

☆

一九三六年六月

今朝も、十人ばかり連れて、市場に買出しに出かけた。朝早くから登所している子供達をつれて、朝の街を、給食の買出しに行くのは楽しい。市場の八百屋に、新しい野菜が沢山積みかさねられてあるのを、子供達はみている。前の方に並らべられた小さな物を、これなあに、あれなあに、と次々質問が続く。自分の知つている野菜の名を、大きな声で言い合つている。八百屋の小母さんが「みんな早いのね。センセ、大変ですね」とお愛想を云つてくれる。郁夫ちやんが、そら豆を見つけて、大きな声で「これ、大きな豌豆まめだねえ」だつて。

注文を済まして、持つて行けるものは、めい〳〵代る番に持つて帰る。

お手伝いの小母さんが来る迄、ホールで遊んでいる子供達をみながら、豌豆の蕊取りでもしておこうと思つて持つて来たら大きい女の子や、チビさん達までがよつて来て「やつてあげようね」と云うので。蕊のとり方を教えてあげると、皆でむしつている。

「センセ、今日、ライスカレーだろ」

「よく知つてるのね」

「あたい、母ちやんに、コンダテ教わつたんだよ」

登志子ちやんが、大きい目をなお〳〵大きくしながら話しかけて来る。すると側でみていたチビ重ちやんと、キム重ちやんが、

「イイナ、イイナ、ライス　カレー」

と、みんなに云いふらしてあるいていたが、又、私の所に戻つて来て、

「センセ、おいも入るんだね」

「そおよ、重ちやん、洗つてくれる？」と云つたら「ウン」と云つて、台所に駈け出して行つて、ポテトの入つたザルを持ち出して来た。そしたら郁夫ちやんも、キム重ちやんも、五、六人よつて来て、お互に、袖をまくりあげてやつて、洗面所で、ポテトを洗いはじめた。S先生が、玉葱もしときましようね、と云つて持つて来たら、其処へもお手伝いが集つた。時々こうして、今日作る、お昼のおかずを、子供達と一緒に準備するのは楽しいことだ。広い台所があつたら、代る番に大きい方の子供をお台所に入れて、出来る丈のことを、お手伝いさせたら、どんなに喜ぶことだろう。白いエプロンをかけて、可愛いい二の腕を出して、大人と一緒に、自分達の食事を、自分達も手をかけて拵えあげたら、どんなに楽しい事か。お昼の時のお当番を、あんなに喜んでするのだから、本当に拵えるお当番だつたら、もつと〳〵待ち遠しがる事だろう。

☆

その時、その時に書き留めた、子供の姿や、保母の感傷やら保育のし方の反省等が、沢山集つたら、同じ仕事をする人の楽しい読み物になるのではないかと思う。つまらない事でも、子供と共に過した人には、その事への共感を呼ぶのではないか。

今なお、設備と、人手の不足に、自分の熱と労仂力とを子供達にさゝげて、日夜苦心していられる保母さんの事を思うと、或年代に、或人がした保育に、ヒントを得たり、自分を慰めて貰つたり出来るのではないかと思う。

不況時代、戦争時代、敗戦時代と、各々の社会状態は違つても、勤労者地区の、仂く母親の問題、幼児の幸福の問題、一銭と十円の単位は違つても、せがまれるまゝに、無駄使いさせるお小遣いと、母親の育児、家庭教育の向上の問題は、形を変え程度の違いはあつても、何時もつきまとつている。

貧しいものは、保育所から、なんでも貰いさえすればよいと云う母親の考え方が、幼児にも、常に与えてもらうことのみ待つて、自分の努力や我慢で、喜びを克ち得る事を学ばせない。私は、この事を、幼児は幼児なりに、何とかしなければと、その時代、時代に思つた。

最初は、例会のある度に、家々をまわつて出席を求めた母の会が、三年目には、地域の懇談会で、自分達から、勉強会の事を、講習会の事を云い出す様になつた事の嬉しさ、けれど、自分の子供の幸のみ願つて、地域の子供達の悪化には無関心であり、自分本位にものを考えて、自分の都合さえよければ満足な社会生活へ目がむかない母親達は、十五、六年前より、よいと云つても、現在もまだ〳〵考え方が開けていない。

こんなことにとりくんでいる保母さん達のために、理論家はつまらないと目もくれなくても、何処かでなされた、さゝやかな幼児との生活のメモが、沢山集つたら、と思う。そしたらかの、若い人々の胸をうつ「遙なる山河」とは行かないまでも、「大いなる果敢なき夢」とでも題せるのではないかしら等、とりとめもなく想うのである。

（21頁より）

創作的な言語経験

話し言葉を通じて、自由に自己を表現することは、どんな年齢層の社会グループの生活にとつても、必要なことである。また他人の表現を理解し且つ判断する能力も、同じく必要であろう。園児は一般に読書の抽象的シンボルをマスターできるほど、なお十分に成熟していないし、文字表現のため要求される微細な筋肉調整にも到達していない。しかしこれら二者の熟練に対する基礎は、もともと口頭表現の巧みさにあるのである。自己の経験をグループに怖れず話すこと、他人のアイディアを聞くことを学ぶこと、発表・発音を改め、語いを豊富にすることは、幼児が自己を十分表現し得るための道であろう。また圧迫から子供を解き放すと話をすることが容易になる。幼児がその仲間と思想や活動を言葉の上で共同にする経験が、多大であれば多大であるほど、話をする可能性が大になり、また好むようになるものである。彼は彼自身の話をドラマ化したり、本の絵を通して創作できるようになり、或は親しいお話を話すことができるようにもなる。さらに幼児は、話合いや「分配の時間」に参加したり、仲間の聴衆に事件を報告することにも参加していく。

（未完）